Title	先駆的共生思想の形成過程 ： エドワード・カーペンターにみる「自然と人為」
Author(s)	稲田敦子
Citation	聖学院大学論叢, 21(2): 21-36
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=938
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

先駆的共生思想の形成過程

― エドワード・カーペンターにみる「自然と人為」―

稲　田　敦　子

The Pioneering Philosophy of Communal Coexistence of Edward Carpenter

― The Relationship between Man and Nature ―

Atsuko INADA

The main objective of this research study will be to examine two major views of the relationship between man and nature. Views of nature formed in the modern enlightenment gave rise to a philosophy that aims for a restoration of an organic view of nature which foresees a new organic relationship between man and nature.

The teleological view of nature is of a certain type of harmonic order (the cosmos) into which mankind's cultural and social conduct is basically subsumed. The true nature of things is not an attribute of some other subject and things that are not within some other subject are considered to be individuals. An entity cannot exist apart from the individual. Therefore, the universal may not exist apart from the individual. Universal things and individual things are not separated and in conflict; rather, the universal exists within the individual, and it is through the individual's transformation that the self is realized.

Since the advent of the modern era, awareness of history has been based upon trends of progress and growth, i.e., the structure of time is thought of as a vertically-divided one. However, a change in the historical view reality to include nature necessitates extremely long units of time, 10,000 or 100 million years, and therefore cannot be adequately depicted linearly. An historical awareness founded on these multilayered, horizontally divided measures of time lies at the foundation of Carpenter's criticism of civilization.

Key words: 共生思想，ナチュラリズム，エドワード・カーペンター，オーエニズム

執筆者の所属：人文学部・欧米文化学科

論文受理日2008年10月10日

はじめに

本稿は，近代文明社会における根源的な問題を先駆的に提起し，また近代日本形成期に一貫して非戦の姿勢を堅持し，デモクラシーを生活基盤に根付かせる「土民生活」思想を提起した石川三四郎（1876～1956）に多大な影響を与えたエドワード・カーペンター（1844～1929）の共生思想をとりあげ，その形成過程および思想的影響の潮流を検討することを目的としている。

環境の破壊が進み，地球の危機が叫ばれている今日，近代物質文明の「負」の問題を根源的な視点から提起したカーペンターは，これまで研究対象として取り上げられることが少なかったが，近年になってその思想の普遍的価値が見直されている。彼は，近代文明社会の問題の一つを「調和が喪失」している状態であると指摘することによって，個と共同性をめぐる問題を中心に，自己の内と外における「負」の側面を見据え，現代における自然との共生および新しい共同体の再編の課題に先駆的に取り組み，さらに実践的な試みを行ってきた。

彼らの思想的な営みは，時代状況が厳しくなり極めて深刻な事態が迫ってきた時においても，変節することはなく，カーペンターは，第一次世界大戦に対する強権発動反対表明を行い，そこにこめられた平和の主張は，石川による非戦論の基底となっている。両者の共通の問題意識は，社会総体とその中での自己を，自然を射程に組み込むことにより，解決の糸口を探ろうとするものである。言い換えれば，彼らの思想的接点は「人間的自然」の全体性の回復を，「本来的自然」と「社会的自然」との調和的状態において成立させる方策を求めようとしたことであろう。こうした問題意識から提起されたカーペンターによる調和的社会論は，『文明―その原因および救治』において先駆的に提示された人間と自然との宥和的関係の危機をめぐる近代文明批判が基盤となっている。そこには，「外的」自然と「内的」自然を両義的に認識することにより，双方を危機的状況に陥らせたものに対する鋭敏な意識が見られる。

第一章「人間―自然」原理と関係性の変容

第一節　自然観の変容

人間と自然との関係は，両者の変化に伴い変容する。この変容が，より顕在化したのは，文明の進歩とともに，そのバランスがくずれたことによる。これは，人間が自然の制約を超えてきた帰結でもあろう。人間は，様々の段階で消費体系，生産様式を生み出してきたが，近代に至り生存のためという基準を大きく超えた。それが「自然」と「近代化」をめぐる問題を，自己倫理および社会倫理を軸として考えさせる契機となったのである。

主観―客観の二元的思考によると，人間も自然もそれぞれが他方に依拠しない実体であると考え

られていた。よって，自然は人間の外部にすぎないと位置づけられ，それにどのように対処しまた制御するのかということが問題となってきた。その結果，科学合理主義的な技術論を全面にたてて解決の方策をさぐることとなるが，このことのみによっては，人間と自然の関係を包括的に捉えなおすことはできないことは言うまでもない。

「生産の行動は自然に対する人間の協力である。種子が地に落ちて実を結ぶと云ふことを自然過程に任せずに，（しかしそれを大前提としたうえで）人間的行動を以って調節，補導することに依って社会的の（生活）が成立するのである。されば生産の行動は自然＋人間の関係である。」[(1)]ここにみる人間と自然の関係が変容していく過程は，行き過ぎた技術開発と経済問題から生じる自然破壊の問題を引き起こすのみならず，人間性の疎外状況を表出させる過程でもあった。機械論的操作主義による大量生産→大量消費→大量廃棄という「静脈なき社会」での「廃棄」の対象は，「物」のみならず人間そのものに及んでいることが事態をより深刻にさせている。

そのような状況にあって，「自然へ還れ」という主張がさまざまな色合いで登場してきたが，「自然への回帰」の主張には，「自然」の回復の主張にとどまらず，「反自然的」「超自然的」要素をはらんだ深刻な側面があることも看過できない。現在明らかなことは，環界としての自然，すなわち人間が自然の一部であるといわれる自然が，人間の創出した自然―人工的自然として新たな関係にはいっていることである。いいかえれば，人間の自然に関する連関が，人工的自然を媒介として構成され，意識されるという事態がかなり決定的な段階にまでおよんできている[(2)]ということであろう。

そもそも自然という概念を明確に定義するには，その言葉の曖昧さとともに歴史的な思想形成過程と相俟って，困難がともなう。大別すると観念的な自然観と情緒的感性的な自然観に整理できよう。観念的自然観は，自然の構造および構成における概念を形成し，自然の諸現象に関する合理的な説明をなすといえる。他方，感性的自然観は人間の情緒的側面や感性などの心的側面と深くかかわるが，さらにこの感性には，自然に対して肯定的なあり方の一方で，否定的ないわば反自然的なあり方の両側面が存在する。

第二節　外的自然と内的自然の相互媒介

科学的文明の継続的を信じ，そのことが知性の発展と同義語となっている状況では，自然は規範の源ではなくなり，すべての自然的な存在がそれ自身の本質的価値を奪われていく。カーペンターが指摘した「調和の喪失」状態は，この本質的価値の喪失をも意味するが，その対象は人間と国家の関係にも及ぶことになる。生活の平和的安定と秩序を維持する外的機構としての国家は，本来個人の労働と生産の体系を安定的に維持するためのものであった。しかしこのような国家によって支えられる体系が拡大すればするほど，それは自然と対立した人工的領域の拡大を意味することになり，個人の内的価値からの乖離は大きくなる。しかもこの文化の領域を支配する論理が機械論的な

ものであるかぎり，それ自身が人間の相互疎外をもたらさざるをえないような構造となる。

この疎外状況に関してカーペンターが警告しているのは，個々人それぞれにおける自己内部の「統一の喪失」である。これは，自己内部において，外的自我と内的自我との不統一という自己意識の中で渦巻く個的状況を見据えることから出てきたものだった。個人の自由な自己決定の余地が各側面から侵食され，縮減されていく中で，自己の性の創造的な運動が変質していく。そしてこの運動の源である生のエネルギーは，方向をかえて，断続的な「硬直」したものになってしまう。いわば，内発的な創造性が喪失した内実のない形態のみが残るのである。(3)これには，カーペンター自身がケンブリッジ大学での聖職フェローを辞するに至るまでの内的煩悶や苦悩も大きく影響している。硬直された静態的な自律は，客体への能動的な関わりにおいて自己を高める主体性を与えるころはできない。また，対象知に拘泥する人格は〈我―それ〉の関係のみに生きることになる。(4)この関係の展開過程で，〈自然〉世界に対しての際限ない支配の拡張が人間理性の専横によって進められていった結果，人間自体までもがこの過程に組み込まれることから回避しえぬこととなる。カーペンターは，この硬直性から脱却する自己更新への志向を，〈いのちを失った環境〉の回復とあいまって模索することになったのである。

「自然」という言葉は，物質と生命と心のいずれか，またはそれらの総合体としての「ありかた」を意味し，次のように概括することができよう。(5)第一は，物質的な元素やそれの集合である無生命の物体を示す「物質的（物理的）自然」である。これは，時間的および空間的に宇宙と一体としてあることから，「宇宙的自然」とも呼ばれる。第二は，第一の自然の一部である有機分子によって発生した生命体で，「生命的（生物的）自然」である。これらのいわば「物としての自然」に対して，第三は，「心的自然」ないしは「内的自然」である。これは，「人間性」「人間的自然」という語によって心の中にある衝動や本能のような「自然的なもの」をも含むことになる。

すでに1820年代なかばに，ロバート・オーエンによって内的環境の問題は定期されていたが(6)，カーペンターの視点は，オーエンとは異なる。「人間は自然を超えるように自然によって素質づけられた存在である」(7)ことの意味するものは，内にある否定的な要素を止揚し，対立するものとの相関的な関係をも組み込む内的自然を通しての人間と自然との媒介性である。カーペンターは，この内的自然への志向を「人間は，……自身の自由と幸福とを把握し，実現するために，すなわち，自分の意識を外的な可死的な部分から，内的な不死的な部分に転ずるために，……自分の運命について意識的にならなければならない」(8)という自己内部への強い認識を基盤として示した。このことは，利己性という特殊性への志向ではなく，個的主観が全体的〈自然〉との合一のうちに存在することを，個人の自律として求められることを意味する。各人が外的な権威や制度によらず，内心に真理を見いだし，それを自己の意志から確信するという自律への志向を，彼は「社会のなかでコミュニティに向かう運動と内なる野蛮すなわち自然運動」という二つの試行を通じて調和を取り戻す努力を進める中で探ろうとした。

第二節　オーエニズムにおける自然と人為

共生思想の形成過程に内包されている思想は多岐にわたるが，本節では，カーペンターの思想形成過程の背景としてオーエニズムにおける「自然と人為」の問題を検討する。その上で，オーエンによって展開された協同思想とそのニュー・ハーモニーでの実験の帰結がどのようなものであったのか，そのオーエニズムの実践の挫折をカーペンターがどのような問題提起として受け止めて行ったのか，その思想的軌跡を検討することとする。

自然を秩序と調和を含むがゆえに美しいものとして賛美する思想は，その淵源をギリシャ哲学に発し，ストア派を経てモンテーニュを介して啓蒙思想へつながっているが，18世紀後半には，自然崇拝にまで高められる。自然は人間の手によって改変されたり，汚染されていない世界であるという見方は，ルソーにおける「自然人」の誕生を促す。しかし，文明と進歩はすなわち人間の堕落と「種」としての人間の衰退につながるという警鐘は先進工業国イギリスに強い衝撃をあたえたといわれている。シャフツベリにはじまる自然の神格化の思想は，ワーズワースによってさらに神秘化され,「ルネサンス以降のヒューマニズム伝統に内在していた一つの過程の頂点に達する」（バジル・ウィリー）[(9)]のである。

しかし，キース・トマスによって，イギリスにおける自然観の変化が実証的に追跡され，それによると17世紀からはじまる人間優先主義の尊大な自然観からの後退が，18世紀後半には，知性や道徳心によってではなく，動物の感覚を尊重する「新しい感性」を形成し，バンサマイトらの社会改革論と融合しながら，動物愛護の思想が育まれていったことを検証している。[(10)]特に，動物愛護運動は，下層階級による動物への残虐な取り扱いへの嫌悪という中産階級の感性と結びついて，さらに，イギリス労働者階級の悲惨な状態から急進勢力の目をそらせる手段ともなっていたことが指摘されている。イギリスにおけるルソーの思想の受容はこのような状況のもとですすめられた。イングランドでは，『エミール』を用いた啓蒙活動が労働者階級の教化をはかろうとする政治課題と結びついていくことをも指摘されている。

オーエニズムは18世紀後半から19世紀前半にかけての多岐にわたる諸思想からなりたっている。環境決定論，功利主義，自然思想などは，この時代にひろく受け入れられ，多くの思想家によって共有されていた諸観念・諸思想であったために，どこかに特定の先行者を想定し，その系譜に位置づけることはできないが，このことはオーエニズムの多様性を示しているといえよう。自然思想の場合も，オーエン自身は，スコットランド道徳哲学者との関係にほとんど言及していないが，彼の基本的思想には，イギリス流の資本主義のエートスに対抗スコットランド啓蒙思想からの影響が見られる。[(11)]

18世紀のスコットランドは，イギリスとの合併（1707年）以降，世界市場を持ち，経済成長と発

展・開発に関心をつよめていくイギリスの資本主義がスコットランドの田園風景を「穀物や牛肉の工場」にしてしまう不安感を強めていった。その中で，「富への道」が，「徳への道」と両立することができるのか，という大きな問題提起がなされることとなる。オーエンは，物の生産過程において機械化されることによってもたらされた科学技術による生産力に直面し，低所得者層の貧困状況の打開策を模索する中で，「富への道」と「徳への道」の両義性を実践的に成り立たせるあり方を模索することとなる。さらに，資本主義の発展につれて，その貪欲指向が人間の社会性や正義という倫理的な伝統的「徳」と相反するという視点から，オーエンは，スコットランド道徳哲学にみられる自然と人為を対照的にとらえる思考方法を，貧困と悲惨の問題を解決するてがかりとして受け取った。文明の進歩につれて，人間の本性が退廃し，害悪と悪徳が蔓延するという考え方が，自然を善とし，人為を悪とする二項対立的な思考から，オーエンは自然を生活圏をも含めた守護神であると考え，他方，人為を善に反するものとしてとらえることとなる。[12]これは，人為を取り除き自然を回復することが，社会の改革には不可避であるとの認識に至るとともに，機械制大工業による大量生産に携わる人間の労働をめぐる本質的な問題を深刻に受け止めることとなる。

彼は，フランス革命末期にひきおこされたイギリス政府の対フランス干渉戦争およびその後のナポレオン戦争を，国家間における政治の論理から論ずるのではなく，科学技術や生産体系が社会に導入されたことによってひきおこされた人間の問題という次元から論じた。

> 「この戦争は，世界中で人生の最盛期にある人間を破壊し，戦いに必要なすべての資料をかくも大量に浪費したのだが……そのことが，多様な生産物をつくり出し，イギリスの製造業者が自ら発明し，実用化しえたすべての機械装置の助けを借りて刻苦精励しても，戦争の需要をみたすことがほとんどできないほどだった。……機械装置は，現在のように彼らの労働によって代わるために使用されるのでなく，労働に奉仕するものにさせられなければならない。」[13]

対外戦争に対するこのような議論は，科学および技術の探究や応用の動機が人間から離れ，その結果を享受する人間の問題から発せられており，技術を動かす体制が社会正義や人間性を真剣に考慮しているかどうかが問題とされているのである。これは，人間の造った科学技術を利用して，企業がひいては戦時体制における国家組織が人間を支配することに対する根本的な批判であった。オーエンによると，この世界は善なる神によって創造されたが，その結果，神によって創造された本来の自然的世界と，誤謬によって導かれてきた人為的世界からなる二重構造で成り立っているのが現実の状況である。したがって，人間性についての精緻な見方を認識し，社会の改善のためにそれを適用するならば，現存社会の表層部にある人為的世界を捨象して，本来の自然的調和の世界をとりもどすことができるであろう。すなわち，人為によって喪失した「内的」自己を回復することをめざすには，人がものを生み出す労働の問題と自然の問題を看過できたいということであり，その基底には，疎外された人間の状態をいかに克服するかという意識が働いていることが窺われる。

オーエンが当時，疎外の観念を自覚していたとは考えにくいが，後に1849年には，私的所有が人間精神を精神から疎外するとのべていることからも，自然と人為についての基本的な意識に関しては，彼の発想のなかに事実上包摂されていたといえよう。

第三章　カーペンターにみる共生思想の形成過程

第一節　文明批判論の背景

普遍的な理念が登場することは，その理念の担い手である個人をめぐる主体的な意識に焦点が当てられるようになり，他者からの要請によるのではない自己自身の自発的な思想形成が要請されてくる。このことが進むと，社会における共同体的な規制や上下関係などの外的束縛は，主体性の形成過程での枷ととらえられるようになるのは，自然な帰結といえよう。しかし，このような自由な個人も，その存在を支えている構造としての世界システムからは自由ではない。近代化が推進されるにつれ，このシステムは発展し高度化していくが，そのことによって，従来の生活基盤はおびやかされ，そきには解体される危険にさらされる。また，肥大化した社会関係の中では，個的な存在は特殊化した状況に封じ込まれ，その結果として，人間の現実的存在感は希薄となっていくこととなる。特にイギリス資本主義の「構造転換」に連動して，カーペンターは，この希薄化をめぐる危機状況を強く意識し，自己自身の内的煩悶と向き合うこととなった。

彼は，この時期に，きわめて文学的な形で主体の問題をとりあげ，「社会調和論」において，「自己実現」「人格の完成」は，一個人だけではなく他我を意識し，各々が他社を彼自身における目的として認め，彼をそのような者として配慮する意思をもつ人びとの間にのみ社会は存在するものであると主張した。

「われわれは，今日，文明と称するやや得意な社会状態のなかにいる。それは我々の中の最も楽天的な者にとってさえ，その全部が望ましいものだとは思われない。事実われわれの中には，それをもって諸種の民族が一度はかからなければならぬ……たとえば子供が，はしかまたは百日咳にでもかかるように……一種の病気であると思っている者もある。しかし，もしそれが病気だとすれば，そこにはまじめに考えて見なければならないことがある。」[14] これは，カーペンターが著した *Civilization: Its Cause and Cure*（London, 1889）の冒頭部であり，カーペンターから思想的に大きな影響を受けた石川三四郎の訳である。

カーペンターの生きた時代は，産業革命後発展してきた工業化の進展がもたらす社会の変化に揺れていた。その中で，工業化の矛盾が集約的に顕在化した1850年代は，イギリス史の中で光と影を描く振幅を大きくさせていたが，その時期にカーペンターは，多感な時期をすごし，ブライトン・カレッジを卒業して，1864年にケンブリッジ大学のトリニティ・ホールに入学することとなる。その２年後には「近代文明の継続について」と題する論文を書き，カレッジのエッセイ・コンテスト

に入賞している。この時すでに彼の生涯の課題となった文明の問題がテーマとされていたが，その内容については，まだ自由主義的ユートピアのあり方を「文明」に求めていた。彼が主眼とした問題は，社会的平等と自由の問題であった。この時期では，まだ「近代資本主義文明」を否定的にとらえることはしていない。しかし，個々人に与えられている自由の量が「国民的前審の尺度」であるとした上で，自由主義は社会的平等の問題と取り組まなくてはならないことを主張した。つまり，「鮮明に限定される階級へと社会が階層分化を遂げるとき，人間の個性は圧殺され，階級利害の階級的圧政が支配する」[15]という危惧を提示している。特に階層分化が進み他者への支配が強化されることによって個人の存在が侵されていくことに対する危機意識は強い。彼は国民性のなかに潜む隠れた進歩の原因つまり「活力」をさぐり，その活性化をはかることを求めた。ここではまだその活性化のもたらす過程および結果をめぐる議論はみられないが，「個々人に与えられた自由」と平等の問題は明らかにされている。

その後，ケンブリッジ大学の聖職のフェローに選任された後，正式に聖職任命をうけるが，この時期に書かれた論稿として，「芸術の宗教的影響」および「自然の風景」がある。その中で，各個人がそれぞれ異なるのは，自然の全体をそれぞれ違った方向で自分のなかで総括するからである，と述べている。つまり人が同じ精神を異なる視点から見るためであるという論旨をもって，「聖なる個人主義」（holy individualism）ともいわれる一面を示した。これは，個人の意識や生活態度の変革を第一義的に考え，その前提のない組織的集団的社会解放の行動にたいして疑問を呈する内省的な志向の表れであろう。こうした志向は，自然のとらえなおしにも通じていくのである。以下に引用するのは，カーペンターから出された友人宛の書簡であるが，その独自の自然観への萌芽的な要素を見ることができる。

> “I have often thought of you and our conversation, while I have been away: and over with the increasing conviction that anything which raises our deepest feelings cannot be a mere shadow. ……To me all scenes of Nature being ultimately the same feeling, there is a deep unity underlying all the diversity of their beauty. And equally do I believe it true that there is a spirit of what is noble and beautiful passing through all men alike, inspiring alike all their wonderfully distinct personalities. Therefore, even if the individual admiration be perishable in its accidents it cannot be so in essence……. You see that I make a medley of Kant, Comte, and Christianity. ……I have been preaching and have consequently got into voluble habits.”[16]

第二節　『民主主義の展望』

北イングランドでの大学拡大講座および成人学校の講師として活動を通して，カーペンターは，ジェームス・スチュアートらとともに継続的に教育の場に参加できない多くの人々に対して開かれた教育の場を提供していった。そのような活動を行う中で，資本優先の商業主義が浸透していく過

程で引き起こされる「負」の側面を強く意識するようになり，そこから彼自身を社会における真の解放への方策を模索するようになった。彼は1874年に大学での職を辞し，イングランド中部の工業地帯の都市シェフィールドに居を移すことになる。カーペンターたちによる地域の人々の中での活動は，運動方針をめぐって対立をつづける首都ロンドンの指導者たちとは距離をおくこととなり，いわば独立したことを内外に明らかにすることとなった。こうした運動を続ける中で，1889年５月，シェフィールドの鉄鋼の街での煙害問題を『シェフィールド・インディペンデント』誌上で公にして，資本主義的近代文明の「負」の側面を指摘し，警告を発するきっかけを作ったのである。

> “……only a vast dense cloud, so thick that I wondered how any human being could support life in it, went up to heave like the smoke from a great altar. An altar, indeed, it seemed to me, whereon thousands of lives were being yearly sacrificed. Beside me on the hills the sun was shining, the larks were singing; but down there a hundred thousand grown people, let alone children, were struggling for a little sun and air, toiling, moiling, living a life of suffocation, dying (as the sanitary reports only too clearly show) of diseases caused by foul air and want of light—all for what? To make a few people rich! And this is not a lunatic asylum! I descended into the smoke. The sun went out; the chimneys towered round me, belching forth thick volumes.”[17]

カーペンターが自分自身の今後について結論を出して，「平民の講師」として立っていこうとしたとき，長文の書簡をホイットマン宛てに送っている。カーペンターがホイットマンの詩に触発されて「心の支え」となったのは，ケンブリッジ時代にさかのぼる。はじめは『草の葉』を読み，慰めと励ましを受けたとあるが，その後に出版されたホイットマンによる『民主主義の展望』に「新思想の鉱脈」を見出すほどの衝撃を受け，自分自身が抱いていた聖職者としての従来からの疑問に拍車をかけることとなった。

『民主主義の展望』の中で，ホイットマンはアメリカの「唯物的で俗的な」民主主義を「精神的なものにしよう」とすることを意図していた。そこには，偽善的な道徳への告発があり，平等意識，民衆への賛歌，簡素化の美徳などが言及されていた。さらに彼の「アダムの子どもたち」にみられる「普通の人にささげられた」賛歌は，高い煙突がそびえるシェフィールドにおいて，灰の山に燃え残りの石炭を拾う子どもたちの姿と重ねあわされて，煙害の被害がどのような状況のもとに人々を追いやっているのかということを，より鮮明に意識させることとなった。その後両者の交流は，断続的に続いており，お互いに自分（ホイットマン）が彼の，また，彼が自分の心のすぐ近くまで歩み寄ったようだと語る間柄となっていくのである。[18]カーペンターが『民主主義の展望』を出版したとき，その題名については，ホイットマンの影響を否定できないという反応はまぬがれないのであるが，カーペンター自身は，そのスタイルを真似しようと思ったことは全くないと述べている。かえって，双方の気質や立場などの相違を強調することにより，自分の意図を明らかにしようとし

た。

カーペンターによる『民主主義の展望』*Towards Democracy* は，彼の社会改革の出発点とも見られるものである。その内容は，第一には，生活そのものが，何が「善良な，美しいもの」なのか，実際に生き価値のあるものにされうる，またされねばならぬということである。第二には，産業それ自身が喜びまたは「快楽」にならねばならないことを，命題として挙げている。この命題から，彼は労働が快楽となるためには，それが自由であり創造的な性質を持たなければならない。すなわち，極言するならば，労働や産業が「芸術」とならなければならない，という主張を引き出している。この「芸術」とは，具体的には詩作や絵画のことのみを意味するのではなく，利潤のためではなく，自分の仕事を出来るだけ完全に果たそうとする労働者は，金や名声のために制作に時間を費やす画家よりもはるかに芸実家であるという意味をも込めたものであった。この主張には，「パン」ではなく「美的な」ものの追求を基盤とする姿勢がみられるとともに，理念のみが先行する運動論ではなく，生活レベルにおいて「パン」のみならず「美」を追求をめざした新しい型の変革論であった。

このような視点の先駆としては，ウイリアム・モリスがいるが，ホイットマンからの影響は見逃せないものがあろう。両者の交流は，ホイットマンがニュージャージーのキャムデンで亡くなるまで続き，その間，カーペンターは２度にわたってアメリカに訪問までしている。その際，すぐ近くの池やそれをとりまく木々にかこまれたキャムデンの小農場におけるホイットマンの生活から，カーペンターは非常に多くのことを学んだ。自然との直接交流を持つ生活の実践，そして自然において「普通の人々」とともに生活することは，「偉大な教訓」であるとして，思想的に先行し分裂していく科学的合理主義に歯止めをかけることは，「疾病」にかかっている近代文明社会において「調和」を取り戻す必要性を強く認識する契機となったであろう。

第三節　新しい共同体の試論

カーペンターの文明批判論は，1889年にイギリスでフェビアン協会主催による新年講演会で行った講演を骨子としている。初期のフェビアン協会は多くの進歩思想の提唱者に開かれていたが，必ずしもカーペンターの論旨に賛成していたとは言えなかった。当時まだ初期にあった社会的解放運動は早くも1887年から翌年にかけて転換期にさしかかり，運動形態または方法論の路線をめぐって多様な提起がなされ，その方向をもさくしている段階であった。このことは，当時の状況が厳しくなった反映であり，失業や未組織労働者の問題がかなり深刻となったことが背景として考えられる。社会階層の在り方が従来の固定された状況から変化し，都市化の進行とともに多様な在り方が顕在化するようになると，雇用関係も変化し，その要求内容も多岐にわたってくる。このことは，運動の層のひろがりとともに，地方の自立的な活動がそれぞれ活性化したことにも現われている。すでにブリストル，ノッティンガム，シェフィールドにそれぞれ地方の組織が出来上がり，活発な活動

を始めていた。

カーペンターは，近代資本主義文明を社会道徳的な「疾病」とみなした。疾病とは，健康を構成する生理的統一の喪失から発生するものであり，その結果，各部分間の闘争ないし軋轢もしくは諸器官の異常な発達，また組織の消耗などをおこすものである。これに対比させて，われわれの近代社会における生活もまた「真の社会を構成するところの統一が失われて，そのかわりに各階級間ないし個人間の闘争，他を侵害するようなあらゆるものの異常な発達，およびおびただしい社会的寄生群による組織の消耗など」[19]が見られ，諸種の民族が一度はかかれねばならない疾病と見るのである。

後の1915年に出版された *The Healing of Nations and the Hidden Sources of Their Strife* では，'class-disease' という言い方をして，一階級が共通の利益に従わず，自らの駅とその行使のみを求めて行政権力までをも奪うならば，それはまさに病気になるのと同様であるとみなしたのである。「社会的疾病」は，身体の病気と同じく，掠奪階級があり寄生状態があり，つまりは調和の喪失となって精神的「疾病」状態にかかっているのであると指摘する。こうした「社会的寄生群による組織の消耗」は，「個人間の闘争，他を侵害するあらゆるものの異常な発達」と不可欠であった。そこでさらに彼が指摘しているのは，個々人それぞれにおいて，自己がその統一体として自分そのものである状態から，自己矛盾や自己撞着などにより自らの中での「統一の消失」をきたすという状態として，「疾病」をとらえていた点である。彼は，語源的に “health, whole” と “holy, heal” は，同じ語源から出ているということをも参考としてあげ，自己内部の問題性を押し出して，外的自我と内的自我の不統一という二重の自己意識の中で渦巻く個的状況をみすえて提示した。この個々人のいわば内的葛藤およびこのことの要因となった組織内部での問題性をその時点でとりあげたところに彼の姿勢が明らかにされていると言えよう。

カーペンターは，環境としての自然のみならず人間の本性を内包させる内的自然が全体性を失い，現実的存在感から遊離していくあり方を認識し，さらには，自己内部において，このような状況に歯止めをかける契機を持ちえなくなることへの危機感をつのらせたのである。このことから，人間が自己の存在とその基盤がゆさぶられていく内外の自然の問題が検討されることとなった。カーペンターが文明批判論で自然への復帰に言及した際に，具体的に考えていたことは，自然との直接交流としての各個人それぞれの生産活動であって，そこには自然との「一体化」を求めるということではなく，また山河での隠遁とは全く位相が異なるものである。

“Do not hurry: have faith……Covet not overmuch. Let the strong desires come and go; refuse them not, disown them not; but think not that in them lurks finally the think you want. Presently they will fade away and into the intolerable light . Will dissolves like gossamer before the sun.”[20]

シェフィールドでの煙害問題を深刻にうけとめ，生産者の利益のために工業と農業とを結合させることによる新しい生産活動の在り方を模索したカーペンターは，その後「産業の村」構想を提案

するに至る。これは，小規模企業の存続をはかり，さらにそれが新しい中心の軸をもって生産活動を発展させていくことを目指して，生産者の主体的な活動組織をつくることを目的に構想されたものである。シェフィールドの刃物製造業者は，仕事の一部を「小親方」に賃貸し，刃物職人の大多数は，自分の家や小さな作業場で働いていた。そうした状況を新しい視点から生かして，小規模ながら直接生産できる共同体をそれぞれ作り，その中で相互の共同活動を目指そうとしたのである。このことは，「田園・工場・作業者」という連結したあり方を生かそうとするものであり，資本主義的大企業による生産活動に対する対抗組織として，地域の実情に即した試みであった。このことこそ，カーペンターの文明批判としての実践的なかたちでの先駆的な意味を持つものであるといえよう。

第四節　個と社会における自由の両義性

カーペンターによる上述のような問題提起がなされた当時にあって，ミドルクラスの内面の問題をはじめて本格的に提起したJ.S.ミル（1806～1873年）の『自由論』（1859年）においての思想的展開は見逃せないものがある。ミルによれば，それまでの「政治的自由」は，少数特権階級の専制に対する戦いとして求められてきた。すなわち，「国家からの自由」が問題であったそれまでの状況に対して，個人の主体性や個性の擁護，そして個人の自由を尊重することを主張することは，政府の専制によって示される国家権力を規制するだけではおさまらない現実が認識され始めた。つまり，目に見える形での国家的な規制だけではなく，目に見えないが，またそれ故にもっと厳しい状況に追い込まれてしまう世間や社会の感傷，世論の圧力にみられる「多数者の専制」（tyranny of majority）による精神的規制が重要な問題となってきたのである。政治権力＝国家からの個人の自由だけではなく，社会的権力からの自由がいかに重要なものであるかを，ミルは初めて体系化して指摘したのである。

「社会的専制は，必ずしも政治的圧制のような極端な刑罰によって支配されてはいないけれども，はるかに深く生活の細部にまで浸透し，精神そのものを奴隷化するのであった，これを逃れる方法はむしろ，よりすくなくなる。……個人の独立に対する集団的な意見の合法的干渉には，一つの限界がある。……その限界を維持することは，政治的圧制に対する保護の必要性と少しも異なるところはない。」[21]このように見るによって明記された「個人の独立に対する集団的な意見の合法的干渉」は，国家の行為として現れる場合だけではなく，組織その維持のために組織論を優先させるときのみならず，非常に身近な生活レベルにおいてまわりの社会そのものが「暴君」となる危険性を孕んでいる状況への適切な指摘であった。ミルは，「国家からの自由」について述べるときも，「政府が完全に国民と一体であって，したがって，国民の声と考えられるものと一致しないかぎりは，いかなる強制権も行使することを欲しないという場合」[22]においても，こうした強制権は，たとえ最善の政府によるものであっても否定されなければならないことを明確化し，政治的圧制よりも社会的

専制がもたらす危険性を説いたのである。このことは，ミドルクラスを支配する行動様式に対する内部からのいわば告発であり，近代市民社会における良心ならびに思想の自由の現実的なあり方を求めたものであった。すなわちミルは，言論・出版の自由，職業の自由，団結の自由を主張し，国家による教育内容の統制の危険性に対し警告を発した。さらに，官僚制の弊害を指弾するとともにそれと並んでそれ以上に，民主主義的「専制」の危険を察知し，現実の生活の中で「社会的専制」や「多数者の圧制」をもたらす悲惨な状況を告発することによって，それまで取り上げられなかった「自由」というものが含んでいる新たな問題を提示したのである。

ミルの示した問題は現代に至るまでの射程を持っているが，その問題の解決を目指して方法が模索されていく中で，カーペンターは，社会的自由の問題追求に加えて，個々の人間およびその自由のあり方を検証し，そのためには生活の基盤をどこに求めるのかということを明らかにして，自然とのかかわりを捉えなおしていく作業を行おうとしたのである。カーペンターが1915年に著した *The Healing of Nations and the Hidden Sources of Their Strife* では，第一次大戦下にあって，ミルが指摘した状況が現実となっている厳しい事態を述べている。

> “The truth is that affairs of this kind—like all the great issues of human life, love, politics, religion, and so forth, do not, at their best, admit of final dispatch in de- finite views and phrases. They are too vast and complex for that. It is, indeed, quite probable that such things cannot be adequately represented or put before the human mind without logical inconsistencies and contradiction. But (perhaps for that very reason) they are the subjects of the most violent and dogmatic differences of opinion. Nothing people quarrel about more bitterly than politics —unless it be religion: both being subjects of which all that one can really say for certain is—that nobody understands them.”[23]

カーペンターは，危機意識の表明にとどまらずに，人間の本来あるがままの自然的状態を無視した「作為的な」社会と理性とを批判し，人間的自然の全体性の回復を基礎にして社会的自然が危機にひんしている状況の克服を目指したのである。この構想は，危機回復のユートピア的構想としてではなく，むしろ現実の国家主義・全体主義ととれを支える諸思想に対する批判的対応によって提示されることとなる。彼の関心は，環境的公正さとともに社会的公正さによって「人間―自然」の関係性の回復をはかる試みであろう。

おわりに

カーペンターは，自然とともに生きることをミルソープでの農耕共同生活により実践したが，その生き方につながる根本的な課題は，「疾病」にかかっている近代文明社会の回復をはかる社会的改革であると同時に，その目的を荷っていく主体の自立を目指すものであった。これらは，両者の

対立もあるが，「ある意味において，互いに均衡を保ち，訂正しあい，そして，いずれも現在の文明とは全く異なってはいるが，しかもあきらかにその内から成長しかけているものだ」[24]という認識に立っていたのである。これが，カーペンターの共生思想の基底となり，自己自身の問題と最も共鳴するものであったのである。

現実の近代文明が進展している状況の中で，外的自然に対する実践的関わりにおいて，人間が対象とするのは，自然に内在する能力やエネルギーである。自然と人間的生との統一性は原始的な一体性ではない。「人間は自己の労働において自然を支配しようとするのではなく，自然の中で労働しつつ生きる」[25]のであり，このことは，「自然と生とが相互浸透的に労働する（ineinander arbeiten）」ことになる。こうした「生活世界的な自然経験」においては，「自然との理性的共生は，全く技術的に支配されてしまってはいない生活形態を要するし，（それは）自然との共生をも再び可能にするだろう」[26]という認識がある。カーペンターは，ラマルクの漸進的発達に連なる進歩思想を基盤にしつつも，「制度と慣習の巨大な多様性」を確認し，国家の介入，官僚制の強化を排除して，社会は新しい理想を探究しながら古いものの外皮を漸次脱ぎ捨てて，共同の生といういわば公共の良心の覚醒のプロセスが思い描かれることになるのである。このプロセスを進展させる内的な生の創造力をカーペンターは，「共同の生」として，その意識の覚醒と成長を自然との相互媒介性を進める中で促進していこうとしたのである。

注

(1) 田中晃『生哲学』浅倉書店，1942年，p.149
　参照　正塚晴康「自然への感性と文明」『比較文明８』1992年
(2) 中村友太郎他編『環境倫理』北樹出版，1996年，p.20
(3) 参照　加藤宗幸「エマソンとカーライルと形式と」『北九州大学文学部紀要』第42号，1990年
(4) 住吉雅美「マックス・シュティルナーの近代合理主義批判」（３）『北大法学論集』第42巻６号，1992年，p.154
(5) 中埜肇「自然哲学の現代的視点―人間学的自然哲学の試み―」『自然とコスモス』岩波書店，1985年，p.248
(6) 永井義雄『ロバアト・オウエンと近代社会主義』ミネルヴァ書房，1993年，p.19「人間は二重の創造により形成される。一つは，出生に先立つもので，霊妙な力を持ち，しかも肉体的にも精神的にもそれ以上に霊妙に組み合わさった神秘な，神による組織化である。もう一つは，それに付け加わる第二の新しい創造であって，主として成人が働きかけて第一の創造を現世で成人にいたらしめることである。」
(7) Vgl.Spaemann, R., *Handbuch Philosophischer Grundbegriff*, Munchen 1973, Bd.4,S.965
　参照　拙著『共生思想の先駆的系譜―石川三四郎とエドワード・カーペンター』木魂社，2000年
(8) Edward Carpenter, *Civilization: Its Cause and Cure*, London, 1989, p.48
(9) バジル・ウイリー『十九世紀イギリス自然思想』みすず書房，1985年，p.23
(10) 前掲書　p.36
(11) 土方直史『協同思想の形成』中央大学出版部，1993年，p.79
(12) 前掲書　p.81

⑬　飯田鼎『ヴィクトリア時代の社会と労働問題』お茶の水書房，1996年，pp.15～16

⑭　Edward Carpenter, *Civilization: Its Cause and Cure*, London, 1989, p.48

⑮　Edward Carpenter, *Towards Democracy (1st ed.), Manchester and London, 1883, pp.21-22*

⑯　Edward Carpenter to C.G.Oates, 12 Sept.1869

⑰　Edward Carpenter, *Sheffield Independent*, 25 May 1889

⑱　Edward Carpenter to Walt Whitman, 12 July 1874, Traubel, *With Walt Whitman in Camden I*, Boston, 1906, p.161　"My dear friend, it is dawn, but there is light enough to write by, and the birds in their old sweet fashion are chirping in the little college garden outside. My first knowledge of you is all entangled with that little garden.　But that was six years ago; so you must not mind me writing to you now because you understand, as I under-stand, that I am not drunk with new wine.……All that you have said, the thoughts that you have give us, are vital —they will grow—that is certain. You cannot know anything better than that you have spoken the word which is on the lips of God today.……I wish I could tell you what is being done by them every where in private and in public. The artisans too are shaping themselves. While money is capering and grimacing over their heads they are slowly coming to know their minds they come to the sense of power to fulfill them: and sweet will the day be when the toys are wrestled from the hands of child-ren, and they too have to become men."

⑲　Edward Carpenter, *Civilization: Its Cause and Cure*, p.84

⑳　R. Sharland in Social Democrat, Aug.1929

㉑　J.S. ミル，塩尻公明・木村健康訳，『自由論』，岩波書店，1971年，p.11

㉒　J.S. ミル　前掲書　p.15

㉓　Edward Carpenter, *The Healing of Nation*, 1915，pp.9 ～ 10

"There are different divisions of human activity, and it is quite natural that　those individuals whose temperament calls them to a certain activity.—literary or religious or mercantile or military or what not—should range themselves together in a caste or class; just as the different functions of the human body range themselves in definite organs. And such grouping classes may be perfectly healthy provided the class so created subordinates　itself to the general welfare, if it pursues its own ends, usurps governmental power, and dominates the nation for its own uses—if it becomes parasitical, in fact—then it and the nation inevitably become diseased; as inevitably as the human body becomes diseased when its organs, instead of supplying the body's needs, become the tyrants and parasites of the whole system." (ibid. pp.13 ～ 14)

㉔　Mittelstrass, J., *Wissenschaft als Lebensform*, Suhrkamp, 1982, S.51

㉕　Ibid., S.61

参考文献

飯田鼎『ヴィクトリア時代の社会と労働問題』お茶の水書房，1996年
加藤宗幸「エマソンとカーライルと形式と」『北九州大学文学部紀要』第42号，1990年
正塚晴康「自然への感性と文明」『比較文明８』1992年
住吉雅美「マックス・シュティルナーの近代合理主義批判」{3}『北大法学論集』第42巻６号，1992年
田中晃『生哲学』浅倉書店，1942年
都築忠七『エドワード・カーペンター伝―人類連帯の預言者』晶文社，1985年
中埜肇「自然哲学の現代的視点―人間学的自然哲学の試み―」『自然とコスモス』岩波書店，1985年
中村友太郎他編『環境倫理』北樹出版，1996年
永井義雄『ロバアト・オウエンと近代社会主義』ミネルヴァ書房1993年
バジル・ウイリー『十九世紀イギリス自然思想』みすず書房，1985年
土方直史『協同思想の形成』中央大学出版部，1993年

J.S. ミル，塩尻公明・木村健康訳，『自由論』，岩波書店，1971年